

平成30年度 第1回屋久島世界遺産地域科学委員会ヤクシカ・ワーキンググループ
及び特定鳥獣保護管理検討委員会合同会議
議事概要

日時：平成30年7月29日(日) 14:00～16:30
場所：屋久島環境文化村センター

議事(1) 前回合同会議の検討経過概要等について

- ・捕獲の効果が顕著に現れて、個体数が減ってきているということは、新しいステージに向かっていると考える一方、この減少が捕獲している地域以外でも起きているので、その関連をどう捉えるかが課題。
- ・捕獲が捕獲地域の周辺地域にも影響を及ぼしていることは考えられるが、高標高や西部までそういう効果があるかどうかは慎重に判断する。
- ・捕獲効率についてスレジカ問題についても議論にはなっているが、目標は低密度にあって、それが達成されていることが重要。

議事(2) ヤクシカの現状について

- ・糞塊法と糞粒法の相関があるという資料だが、決定係数が0.3くらいのため、それほどは高くない。
- ・これから高標高地が議論になってくるので、環境省からの資料の糞粒密度の低い部分や、鹿児島県からの資料の低密度の部分の中の詳細がわかるとよい。
- ・国有林のCPUE低下の原因が、おそらく生息数と関連することについて異論ないが、だからこそ、捕れにくくなったシカをどう捕獲するかが、今後議論されていいのではないかと。
- ・糞粒法による生息密度について、河川界区分8では、海岸域は捕獲されてないが、減少している。河川界区分5は増加傾向にあるが、この要因が把握できれば、今後の対策にも役立つ。要因として何が考えられるか。
- ・河川界区分5は朝日牧場があつてこの周辺ではシカは増加していない、県道より上部には草地があつてこれが誘引しているのではないかといった仮説が考えられる。
- ・生息密度について、糞塊法では河川界区分8で今年増加しているが、糞粒法では減少していることについて、糞粒は局所的な密度把握になり、糞塊は広域把握になるので、糞塊調査結果の方が、より平均的な状態を判断できると思われる。
- ・糞粒法でも糞塊法でも一貫して行えば状態空間モデルに活用でき、個体数推定ができる。
- ・糞粒法では、調査地域が食べつくされてシカが使わない状況になり局所的な密度が下がることが起こるが、周囲を含めてみると、シカは餌が残っている場所に移動しているだけのこともあり、糞粒法だけから、西部が減ってきているといった評価はまだ早計だと考える。
- ・密度指標を使ってIDW法により内挿して可視化するにあたっては、特定の場所で高い値が観察されるとそれに引っ張られることに注意する。また、内挿するセルの解像度や均一性を考慮する。
- ・鹿児島県の密度分布パターン図は局所の密度が他に波及しないように作成している。
- ・推定した地図は、その推定法によって変わってくるので、1次データを比較できるとよい。糞

塊のデータを今後は、個々のメッシュで評価できるようにしてもらいたい。

- ・永田の灯台の先から保護地域になっているが、それを境界として狩猟圧に差が出ている。その差が密度分布パターンの図には反映されていないかと思う。

議事（3）平成 29 年度及び 30 年度の取組について

- ・ヤクシカは少しずつ減っていると思われるが、捕獲計画を見ると目標達成には今より捕獲数を増やさなければいけないため、必ずしも順調に減っているわけではないと考えられる。シカの推定個体数が減少傾向にあり少し安心している部分もあるかもしれないが、今後、ただ増えている分を獲っているだけにならないよう、もう少し捕獲圧をかけ、雌を選択的に獲って頂きたい。
- ・密度操作実験では、密度を操作することの確実性が大切。ワナは最初のうちは獲れるが、すぐに獲れなくなり捕獲効率が低くなる。そういったとき、銃を持った人が能動的に、時間やフォーメーションを変え、捕獲効率を一定にしながら行う捕獲を検討頂きたい。
- ・最終的に目指すシカの密度は相当低く、かつ安定的に維持しないといけないという技術的な課題があることから、密度操作実験とは異なる場所で行うとしても、シャープシューティングを行うことによる密度操作の効果、密度低減の効果は測定する必要がある。
- ・密度操作実験について、個体数や捕獲数を目標にするのが全て良いわけではないが、成功/失敗が見えるよう、もう少し明確な目標がほしい。
- ・密度操作実験について、「シャープシューティングでなければワナ」ではなく、大量捕獲に適したものは銃猟や追い込み猟など他にもあり、必ずしもこの 2 つ以外の方法がないわけではない。
- ・密度操作実験について、半山と川原では伐採履歴が違い遷移も異なってくるので、対照として見るのは難しいと考える。一方、西部の世界遺産地域の南端に当たる瀬切は、平坦な地形で強度の伐採を戦時中に行い、その後植林するなど、川原地区と条件がよく似ているため、調査対象地域とすることを検討頂きたい。
- ・密度操作実験について、野外調査において調査地点とコントロール地点が 1 つずつはあまりに少ない。実験的な意味でいくと 7~10 点はほしい。コントロールという位置づけをやめて、実際の調査から言えることを言うしかない。
- ・密度操作実験について、全島で密度管理している中で、西部地域だけ管理しないわけにはいかない。一方、絶滅危惧種対策の観点からすると、西部は優先度が低く、奥岳を優先にすべき。
- ・密度操作実験について、計画が一人歩きしないよう、西部での密度操作実験の実施にあたりクリアしなければならない課題も記載する。
- ・密度操作実験について、中途半端な密度操作実験は逆に批判的となる。調査捕鯨について「1 頭で何が分かるのか」と、国際司法裁判所で負けた事例もある。
- ・奥岳等の高標高域で行うヤクシカの行動圏の把握は、たまたま最初に捕獲できた 3 頭としないようお願いしたい。特定の場所に執着心のある雌成獣 3 頭なり、逆に執着心のない雄 3 頭なり、目的を持った調査をお願いしたい。
- ・密度操作実験について、「スマートディア」という言葉は、公的な文書では「警戒心の強いシカ」等の言葉に変えた方がよい。
- ・シャープシューティングは、あくまでも体制論であり、「誘引して狙撃する」という方法論では

ないことを改めて認識しておく必要がある。

- ・農業被害金額はピークの平成 23 年に比べ平成 29 年は約 10 分の 1 に減少している。このような場で関係者一丸となって対策を実施し成果をあげていることはもっとアピールし、評価されて良い。
- ・農業被害に対して住民の理解はあるが、生態系被害についてはどうか。もっと積極的に発信し、普及啓発を行うべき。合意形成を図ることが大切。
- ・西部林道の道下は現状で本当に世界遺産と言えるような森なのか、原点に返って考える必要がある。

議事（４）生態系管理の目標について

- ・指標を決めるのはよいが、あくまで指標なので、その指標を使って最後に評価することが大切。
- ・植生被度の目標を必ずしも保護柵内と同じにする必要はない。知床ではシカをゼロにすると、自然植生の回復に際して、逆に弊害があるという論文も出ている。
- ・「現実的な努力の範囲で達成可能性がある」というのは少しわかりづらい。
- ・シカを減らしても原植生が戻らないことが他事例でもあることに留意する必要がある。
- ・生態系管理目標について、IUCN が評価している低地の照葉樹林にも注目する必要があると考える。